演目の説明

八岐大蛇（やまたのおろち）

　高天原を追われた須佐之男命が出雲国の斐川（現在の斐伊川）にさしかかると、老夫婦が嘆き悲しんでいます。理由を聞くと、夫婦には 8 人の娘がいましたが、7 人を大蛇に奪われ、とうとう最後に残った奇稲田姫（くしいなだひめ）まで奪われるとのこと。

　それを聞いた須佐之男命は、老夫婦に毒入りの酒を作らせ、これを大蛇が飲んで酔っ払ったところを退治することとし、激闘の末に見事に退治をしました。そのとき、大蛇の尾から出た天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）は三種の神器の一つとして献上されたと言われています。

　この八岐大蛇は「古事記」や「日本書紀」といった神話を題材にした演目で、大地の神様が乱れ狂う大洪水を制して豊かな出雲の国づくりをしたと伝えられており、また、頭が八つの大蛇の姿は、七重八重に連なる中国山地を表しているとも言われています。

見どころ

　この演目は、多くの大蛇が登場し、口から火を噴きながら戦うスペクタクル巨編。神楽団によっては大蛇の頭数も違いがあり、大蛇が絡み合って威嚇をするなど演出にも工夫が凝らされています。